載ってる絵、全部今年日本で見られます。 国内美術館が持つ作品 全550点一覧も!

BRUTUS®

印象派、わかってる?

マネもゴッホも
印象派じゃないの?

2010 6/15 特別定価630円

Magazine Brutus – Japon –juin 2010

1888.02.20 → 1889.05.08

©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

L 「アルルの寝室」
油彩、カンヴァス　72×90cm　1888年
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）、アムステルダム

1 1970年代に再現されたラングロワの跳ね橋。2 ゴッホの作品そのままに今も残るカフェ。3 アリスカンの墓地。4「黄色い家」は、このカフェの手前にあった。アルルには、ほかにもゴッホが制作した場所が残されている。

アルルのゴッホゆかりの場所を訪ねて。

アルルは、起伏のある土地に作られた古代ローマ時代に遡る古い街だ。ここには、アリスカンというローマ時代の墓地がある。キリスト教が広まると、敷地の奥に聖堂が建てられ聖人が祀られた。ゴッホとゴーギャンはこの墓地の風景を描いている。背中合わせで制作したのではないかと思われる作品もあり、制作に励む2人の姿が脳裏をよぎる。

「夜のカフェ」に描かれたカフェは健在だが、2人が住んだ「黄色い家」と、ゴッホが描いた「ラングロワの跳ね橋」は、いずれも第二次世界大戦中に爆撃されて、今は残っていない。

ゴッホが作品「黄色い家」に描き込んだ家の背後に建つカフェは、現在も営業しており、壁には往時を偲ばせる「黄色い家」の写真が飾ってある。

ラングロワの跳ね橋は、当時の場所から南に下った運河沿いに再現されている。場所は異なってはいても、のどかな田園風景に、ゴッホがアルルで感じた開放感を追体験できるだろう。

●掲載作品が出品される展覧会情報および各マークの詳細は、p.74にあります。

アルル

芸術家の共同生活を夢見て。

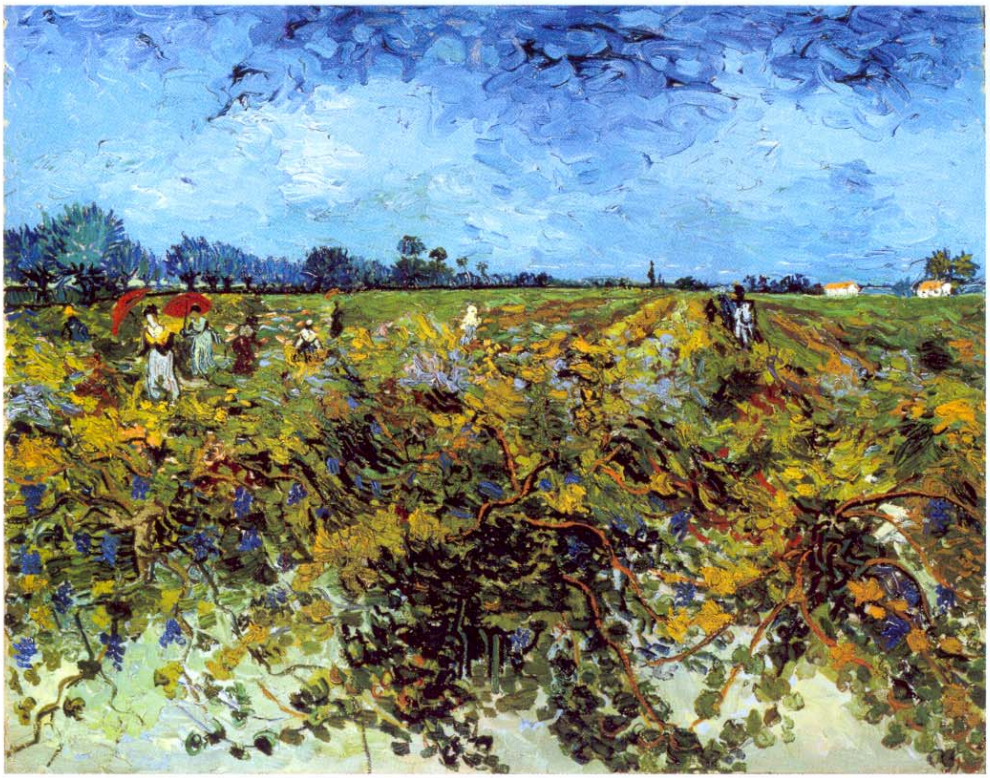
パリでの画家たちとの交流を通して、ゴッホは芸術家たちとの共同生活を思い描くようになる。一緒に生活することで連帯を強め、創造性をさらに高められるのではないか。ゴッホはその夢を実現するために、アルルに赴く。

©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

L 「ゴーギャンの椅子」
油彩、ジュート布　90.5×72cm　1888年
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）、アムステルダム

©Kröller-Müller Museum, Otterlo

L 「糸杉で囲まれた果樹園」
油彩、カンヴァス　64.9×81.2cm　1888年
クレラー＝ミュラー美術館、オッテルロー（オランダ）



©Kröller-Müller Museum, Otterlo

L 「緑の葡萄畑」
油彩、カンヴァス　72.2×92.2cm　1888年
クレラー＝ミュラー美術館、オッテルロー（オランダ）

タンギー爺さんの店で日本の浮世絵に出会ったゴッホは、たちまち浮世絵の魅力の虜になった。西洋の絵画にはない大胆な構図と色遣いは、日本への憧れをかき立てた。「いつか日本に行ってみたい」と思うようになる。ゴーギャンをゴッホに紹介したのは弟のテオである。ゴーギャンもまた浮世絵に関心を持っていたことから、2人の交流が始まった。

1888年2月、ゴッホは突然アルルに旅立つ。理由はよくわかっていないが、テオに宛てた手紙が残っている。「僕らは日本の絵を愛し、影響を受けている。……それならどうしても日本へ、つまり日本によく似た南仏へ行かねばならない」。なぜ南仏が日本に似ているのか、その理由もまた謎だ。

いずれにせよ、アルルの光によってゴッホは独自の色彩を獲得することになる。「空はどこもかしこも素晴らしく青く、太陽は薄い硫黄色の光線を放っている」（テオへの手紙より）

ゴッホは仲間たちに声をかけるが、結局アルルにやってきたのはゴーギャン1人。ゴーギャンの到着する前に描かれた「アルルの寝室」には、未来への希望が込められているかのようだ。しかし、耳切り事件間近に描かれた「ゴーギャンの椅子」には、奇妙なことに、座面の上に火をともしたロウソクが置いてある。しかも、今にも転げ落ちそうだ。ゴッホには何か予感があったのだろうか……。